

東京日々新聞

八百五十一号



洋酒の閑さ  
只獨り飲居る椽外  
物音の桐の葉を小倉と見え久しく音信ぬ義弟  
何事ありたるか此の先頃遠國より病死するの報ありし  
友愛の情切あるより幻姿と現せし影八千種の  
中消虫の音をのりぞ残りけし

轉々堂主人録

秋暑き庭面掃て打水。瀟々草樹の露の玉葉未と傳ふ  
音絶て消る疾き光景と見ゆ思へる會者定離と  
自ら感ずる愁情の鬢を脚の散さんとして  
簞の書室より  
玉来し

一蕙齋芳幾



野見屋

ホクエ